

(六) 結び松

磐代の浜松が枝を引き結び

真幸くあらばまた還り見む

(141)

老婆の低くむせぶような歌声が長く尾を引いて流れる。菟野の即位の年の秋、紀伊行幸に従駕した川島は、数人の供を連れて海を見下ろす磐代の丘を訪ねた。白砂の向こうに広がる海は、高く澄み切った空の下で翡翠色に輝いている。浜風を受けて傾いた松の緑が前日の雨に洗われて艶やかに息づいている。

「あれは後岡本宮の大王様の四年の秋でございました。もう三十年以上も前のことでございます。難波宮の大王様が亡くなられて、有間皇子様のお立場はそれはそれは危ういものでございました。皇子様は賢いお方でしたから、ご病気になるたことにして宮に籠っておられました。ところが大王様が紀温泉に行かれた時、何と留守官の蘇我赤兄様がたびたび宮へ訪ねてこられたのです。」

有間の宮の婢だったと言うその老婆は、有間が殺されてからずっとこの丘に住んで松を守ってきたと言う。

ザザーン　　ザザーン

浜辺に打ち寄せる波の音がかすかに伝わって、川島の一行を有間の昔へと誘う。頭上を掠めるように飛ぶ鷗を眼で追いながら、老婆はゆっくりと語り続ける。

「大王のご政治に三つの過ちがございます。第一に大きな倉を建てて民の財を積み集めていること。第二に長い溝を掘って公の糧を損ない費やすこと。第三に舟に石を積み運んで丘にすること。この三つでございます。」

赤兄が声を潜めて語りかける。己巳の変で当時の大王宝の弟軽皇子を担いだのは、摂津、河内を中心とする、新羅に親しい勢力だった。蘇我蝦夷、入

鹿親子を倒して大王となった軽は百濟派の強い大倭を嫌って難波に都を定め

た。

ところが半島で百済と新羅の戦闘が激しくなるにつれて、大倭国の朝廷内でも百済派、新羅派の対立が表面化してきた。大倭を中心とする百済派の勢力は、宝や中大兄を奉じて大倭へ帰ってしまった。こともあろうに難波宮大王の後間人皇女までが兄中大兄に従ったのである。これには、同母兄妹でありながら中大兄と間人の仲を噂する者まで出る始末であった。

難波宮に取り残された大王が恨みを呑んで死んでいった最期を目の当たりにした有間にとって、再び大王に返り咲いた宝の治世を批判する赤兄の言葉は耳に心地よい。当時何事にも派手好みはしやうずみの宝は、神を祀るための石造りの齋場を造ろうと大々的な土木工事を急がせており、巷ちまたには相次ぐ徴税や労役に不平の声が高まっていた。

「今の大王のなさりようを快く思わない者は大勢おられます。今、皇子様がお立ちになれば亡き大王にご恩を受けた者たちが一斉に立ち上がりましょう。」まだ十九歳の若さである。有間は赤兄を信じた。

ある晩、有間は赤兄の館の楼閣に登って策を練った。守大石、坂合部薬、塩屋しおやのコノシロも顔を合わせた。

「先ず、大宮を焼いて、兵五百で紀の津を押さえる。これで紀温泉きのゆにいる大王の一行は身動きができない。万事うまくいく。」有間は強気である。

「確かに仰るとおりです。だが皇子には勢いがありません。皇子はまだ十九歳であられます。成人なさるまでお待ちなされませ。成人なされば人もついで参りましょう。」

軍事に通じている大石はあくまでも慎重である。「成人するまで待っていたら、俺の方が殺されてしまう。」

その時、触れもしない脇息きょうそくが、音も立てずに折れた。途端に生臭い風が渦を巻いて吹き抜ける。

「やめよ。」  
風の音か、人の声か、はたまた地下の死霊の声か。いや、あれは確かに亡き父の声。有間は慌てて楼閣の中を見渡した。だが父の姿はどこにもない。皆一様に顔を強張らせて、折れた脇息を見つめている。長い沈黙が続いた。

沈黙を破ったのは大石である。

「よみましょう。神のお告げです。」

「それがいい。よみましょう。」

葉が応じた。赤兄は黙っている。魚制魚も押し黙ったままだ。

「やめよう。」

父の声は耳に残っている。有間は宮に戻った。

赤兄が有間の宮を囲んだのは、この後すぐだった。有間は捕えられ、そのまま紀温泉に送られた。途中海の見える磐代の丘で休んだ時、有間は草の根を松の枝に結び付けて歌った。

磐代の浜松が枝を引き結び

真幸くあらばまた還り見む

(141)

おそらく有間自身は再び見る事のない己の運命を悟っていたに違いない。

「なぜ謀反を企てたのか。」

中大兄の尋問に有間は答えた。

「天と赤兄とが知っているだろう。私は何も知らない。」

有間と魚制魚は殺され、大石と葉は流された。後、大石は白村江はくすきのえで戦い、敗戦後は遣唐大使となつて戦後処理にあたった。葉は壬申の乱で近江方の将として戦い、戦死した。そして、赤兄は近江朝の左大臣にまで昇りつめ、壬申の乱の後流罪となった。

老婆の昔語りを聞きながら、川島は有間の無念を思つて泣いた。いつの間にか日が沈もうとしている。夕映えに赤く染まった海が少しずつ光を失っていく。川嶋の口から鎮魂の歌が流れる。

白波の浜松が枝の手向け草しろなみ え たむ ぐさ

幾代いくよまでにか年の経ぬらむ

(34)

有間の無念は大津の無念と重なつて、川島の胸に迫ってくる。有間を殺したのは近江宮大王である。大津を殺したのは近江宮大王の娘菟野である。そして大津を「密告」したときれるのは同じく近江宮大王の子である川島自身なのだ。あれからもう四年もたったというのに、今でも昨日のことのように思い出す。

あの夜、中臣意美麻呂おみまろがひそかに訪ねてきた。意美麻呂は慌しく挨拶をすると、辺りを見回して声を潜めた。

「物部麻呂が兵を集めています。大津皇子様の御謀反が発覚して明日の朝にも討手が向けられるそうです。私はこれから大津皇子様のお供をして東国へ逃げます。皇子様もすぐにお逃げ下さい。」

「なぜ俺が逃げねばならぬのか。俺は謀反などに関ってはおらぬぞ。」

「皇子様が天津皇子様と親しくしておいでのごことは大后様もご存知です。ぐずぐずしていれば殺されます。」

「殺されるだど。」

とつきに有間の事件が脳裏をよぎった。

あたふたと出て行つた意美麻呂に音もなく近づいた背の高い黒い影。素早く耳打ちするその頬に月光を浴びて浮かび上がる傷跡。

（おや。あれは。大舎人の意美麻呂ではないか。あの背の高い男は誰だろう。）ふと足を止めて闇の中で眼を凝らす人影に、二人は気づいてはいないらしい。別段人目を避けるふうもなく西の方へすたすたと去って行く黒い影を見送ると、闇の中の人影は首を傾げながらその場を去った。一方、黒い影は山の麓のとある邸に滑り込む。邸の庭にうずくまる黒い影に下知したのは北辰の星の男。その声を聞いたのは池のほとりの石の亀だけである。この夜の意美麻呂の動きを川島は知らない。

川島は菟野を恐れた。

「謀反など口実に過ぎない。邪魔者は殺されるのだ。逃げねば。馬か。いや、馬は人目に付き過ぎる。歩いて行くか。だが、歩いてどこまで行けると言うのだ。麻呂がもう兵を集めていると言うのに。今さら逃げられるのか。俺が逃げたら長や弓削はどうなる。」

川島の心は千々に乱れる。中大兄の子である川島はもう出世を諦めている。だが、妹大江の生んだ長と弓削は浄御原宮大王の子である。この二人の甥だけは守らねばならぬ。

「自訴しよう。俺の命と引き換えに二人の命を助けるのだ。」

夜の明ける前に川島は竹田王<sup>たけだのおきみ</sup>を訪ねた。竹田は川島の下で修史事業に携わっている。

「物部麻呂が天津皇子を謀反の罪で捕えると聞いた。俺も捕まるらしいが俺は何もしてはおらぬ。逃げも隠れもせぬから調べてもらいたい。」

竹田の顔が強張る。

「天津皇子様がご謀反。そんな話、聞いてはおりませんぞ。一体、誰がそんなことを申しました。」

「中臣意美麻呂だ。物部麻呂が兵を集めているから、今から天津皇子と一緒に逃げると言っていた。」

「わかりました。とにかくしばらくここでお待ち下さい。」

慌てて部屋を飛び出した竹田は、何時までたっても帰って来ない。様子を見ようと扉を開けた川嶋は、兵士に行く手を阻<sup>は</sup>まれた。

竹田が戻ったのは三日後だった。

「よろしゅうございました。長らくご不自由をおかけ致しましたが、皇子様の無実は明らかです。何のお咎めもございません。宮までお送り致しますよう。」

宮へ戻ると長と弓削が飛び出してきた。

「どちらへ行っておられたのですか。母上がたいそうご心配でしたよ。志貴の叔父上も心配して来ておられたのです。先程大宮へ様子を見に行かれたところですよ。」

川島も志貴も中大兄の皇子だが、共に母の身分が低い。しかも川島の妻も志貴の妻も忍壁の妹だから、日頃からよく行き来している。

「大津兄上はどうして殺されたのですか。」

口々に尋ねる間に川嶋は驚いた。

「な、何と言った、今。大津が殺されただって。」

「ご存じないのですか。一昨日物部麻呂が兄上の宮を囲んだという話ですよ。」

「伯父上のお姿が見えないので、母上がとても心配なさっておられたのです。」

「殺されたのは大津だけなのか。」

「さあ。三十人ほど捕まったと聞きましたが。」

「大津と意美麻呂は逃げたのではなかったのか。」

「兄上は宮におられたら幸いですよ。」

「意美麻呂も家で寝ていて捕まったようですよ。」

川島は頭が混乱してきた。逃げたはずの大津は、逃げていなかった。そして、殺された。意美麻呂も逃げていなかった。では、意美麻呂の言ったことは嘘だったのか。それとも、意美麻呂が訪ねて来たのは夢だったのか。

「これは一体どうしたことか。俺は何かとんでもない間違いをしたのではないか。」

一月後、新羅の僧行心が飛驒の寺に移されただけで、後は全員釈放された。都では、大津の死は、川島が密告したからだと言われたのだ。

磐代の丘を訪ねてから早一年が過ぎた。世の中はどんどん川島の思いと違う方へと流れて行く。今や菟野の血族のみを神聖化すべく歴史の見直しが進められている。浄御原宮大王に直接史書の編纂を命じられた川島としては、今行われている歴史の書き換えが面白くない。いまだに独自の作業を続けている川島である。

今も十日ほど前から紀温泉へ行くと届けて茅渟の古い墓を調べて来た。今夜は浄御原宮大王の齋会がある。

「急がないと間に合わぬぞ。」

坂を越えれば大倭である。川島は馬に鞭を当てた。その時。

ヒュツ。

鋭く空を切る気配に、振り向いた刑部垂麻呂の目が一瞬凍りついた。供の

帳内たちも呆然と突っ立っている。馬上の川島の首に矢が刺さっているでは

ないか。鞭を食らった馬はそのまま走り過ぎる。

ドサツ。

川嶋が落ちた。垂麻呂は馬から跳び下りると川島に駆け寄った。

カサツ。

笹が揺れた。人だ。狩人か。弓の先が叢に消えた。我に返った帳内が慌てて後を追う。

ヒュツ。ヒュツ。

叢から飛んでくる矢にひるんだ隙に、叢の音は遠ざかって行く。

「川島皇子様が亡くなられたそうだ。」

「なんと。」

川島の突然の死が伝えられたのは、紀伊行幸の翌年の九月九日。折しも浄御原宮大王の齋会の席だった。

「ご病気だったのか。」

「大津皇子の祟りではないのか。」

何時の世にも他人の不幸は興味本位に噂される。

「祟りではないらしいぞ。なんでも狩人の流れ矢に当たられたと聞いた。」

「流れ矢などで簡単に死ぬものではないぞ。」

「初めから皇子様を狙ったのではないか。」

「それで、その狩人は捕まったのか。」

「いや。逃げたらしい。」

「やはり、誰かが殺させたに違いない。」

「誰かって、誰が。」

中の一人が辺りを見回して一段と声を潜めた。

「去年の紀伊行幸の時、川島皇子様が磐代で歌を詠まれたのを知っているか。」

「もちろん、知っているとも。『白波の浜松が枝の手向け草』という歌だろう。」

「そうだ。あの歌が近江宮大王を批判しているというので大后がお怒りだと聞いた。」

「どうしてあの歌がいけないのだ。」

「有間皇子を悼むいたということは、有間皇子を殺した近江宮大王を批判しているということだ。近江宮大王は太后の父君だからな。しかもその裏には大津皇子を悼む気持ちが重なっている。ということは大津皇子を殺した太后をも批判しているというわけだ。」

「なるほど。では、太后が怒って川島皇子を殺させたということか。」

「おいおい。それは聞いただけの話だ。第一、大津皇子様を密告したのは川島皇子様だそうではないか。俺にはわからぬ。」

北辰の星の男もまた、ざわめきの中にいる。

僧の読経の合間から漏れてくるざわめきに、佐留はすぐにも川島の宮に駆けつきたい衝動にかられた。濃厚な川島が、大津を密告したとの噂を立てられて、辛い思いをしているのを気の毒に思ってきた。大江はどんなにか嘆いていることであろう。長や弓削はどんなにか心細い思いをしていることであろう。

昨年即位して新体制を固めた菟野は、前代からの懸案となっていた祭祀の確立に乗り出している。その過程で神々の系譜の書き換えも行われた。中臣大嶋が書き上げた『天神賀詞』は、ことある毎に読み上げられている。佐留もまた、好むと好まざるとに関らず、この仕事の一翼いちよくを担になわされている。この新しい神を祀るために、この秋には大嘗会が、また来春には伊勢行幸が予定され、着々と準備が進められている。

歴史の書き換えは、神代にとどまらず人代にも及ぼうとしている。八月には主な十八氏に祖先の墓おくづきのかみ記を上進するよう命令が下った。これはかつて前大王が始めた正史編纂の事業を受け継ぐようであり、意図するところは明らかに違っている。

この流れの中の川島の死は何を意味しているのか。川島は先代の正史編纂事業の総括責任者である。もしこの書き換えの命に従わなかったとしたらどうなるか。全ては憶測おくそくの域いきを出ない。ひそやかに忍び寄って、じわじわと真綿で首を絞めるような、どす黒い時代の気配を、詩人は肌で感じ取っていた。

もし佐留の憶測どおり、川島が菟野の怒りを買ったのであれば、今の佐留の立場で川島の宮に駆けつけることは危険すぎる。今、危険を冒してまで長や弓削に近づくより、今しばらく菟野の側にいる方が、いざと言う時の役に立つと佐留は考えた。佐留はひそかに川島の妻はつせんのむめ泊瀬部皇女に川島の死を悼む

歌を贈った。泊瀬部の兄忍壁は世俗から離れて飄々とした人物であるから、菟野に眼をつけられることもあるまい。

一方で、川島の死は菟野にも奇異の念を抱かせた。噂どおり誰かがわざと川島を殺させたのだろうか。もしそうだとしたらそれは誰だろう。いずれにせよ、菟野の与り知らぬところであった。身分の低い母から生まれたこの弟を菟野は気にもかけていなかった。川島の死まで自分のせいにされてはたまらない。だが、そんなことぐらいで大王たるものいちいち弱音を吐いていたらようか。菟野は独り背筋を伸ばして人々の視線を無視した。

草壁亡き今、草壁の遺児軽王に大王位を継がせたい菟野である。これまでの慣例からして軽王の即位の前に立ちはだかつているのは、さし当たって長弓削、舍人の三人か。いやもう一人、高市がいる。高市の母は倭国の出ではあるが、壬申の乱の功績もあり、実力は第一である。

『天神賀詞』では天照大神が御子を天降すことになっております。これを御子ではなく御孫としてはいかがでございましょう。そうすれば自ずから日継は他の皇子ではなく、軽王ということになりましたよ。」

史の進言に菟野は唸らずにはいられない。この智謀は一体どこから湧いてくるのか。史の父鎌足は菟野の父近江宮大王の「懐刀」と呼ばれる忠実な参謀だった。鎌足が生きていれば壬申の乱は起きなかつたであろう。

「いま一つ。」  
「申せ。」

「大王の御子孫は、二世の御子を皇子、三世以下を王と申し上げております。王が皇子を差し置いて日継となられるのは難しいかと思われます。先ず軽王を皇子に格上げせねばなりません。」

指摘されて初めて気づいた。『令』に基づく新しい官制が実施されて、大王の権限は不動のものになったかのように見えた。だが、その分大王自身も『令』の規定に縛られて意のままにならないこともあった。令に詳しい史の存在は菟野にとっても頼もしいものであった。

今では誰もが菟野の命のままに動く。だが、誰一人として菟野の心の奥を理解しようとする者はいない。それは何も今に始まったことではない。かつては夫浄御原宮大王ですら菟野の気持ちをわかってはしなかった。菟野はずっと一人だった。大勢の人々に傳かれていながら、菟野は孤独だった。

そんなものと菟野自身思い込んでいた。

そんな菟野の前に現われたこの男は、一生懸命に菟野の気持ちを理解しようとしている。何も言わなくても先へ先へと菟野の思いを実行してくれる。

菟野にとっては新鮮な驚きだった。人に理解されると言うことはこんなにも暖かく心地よいものであったのか。



菟野はいつの間にか史に鎌足の姿を重ねてしまっている。この時、菟野四十七歳。史、三十三歳。菟野にとっては或いは遅すぎた春の到来であったかもしれない。

その秋の大嘗会はとりわけ盛大に行われた。神祇伯中臣大嶋の読み上げる『天神賀詞』の「皇子降臨」の節が「皇孫降臨」と変えられているのに気づいても、表立って異議を唱える者はいなかった。不満は深く潜行していく。

『天神賀詞』は「神々の誕生」から始まって「国産み」を経、「禊みそぎ」による「三貴神の誕生」、「誓約うけひ」を破った須佐男の「追放はらひ」、「国譲り」と大国主の「死」、「皇孫降臨」と続く壮大なドラマである。「誓約」「国譲り」は『古事記』の神話化であり、「追放」「死」は『律』の神話化である。一見、これまでの各氏族の伝承をつないでいるだけのようであり、その実、中大兄、大海人、菟野と代々の大王が目指してきた『律令制度』を裏から支える、全く新しい祭祀の創設である。

年が明けて、春三月。この新しい祭祀開設の総仕上げのために、菟野は伊勢の日神の宮を目指して旅立とうとしている。壬申の乱で夫大海人と共に遙拝したあの日神である。その行幸を止めようとしている男がいる。中納言三輪朝臣高市麻呂あそんたけちまろ。

「天子は農耕の時に行幸すべからず。」

表向き理由である。古来飛鳥人の心の拠り所よこしろとして、三輪山の大物主を祀ってきた三輪氏である。その大物主をはじめとする大倭の神々が、国神くにのかみとして追い払われ、これからは日の神の子孫である天神あまつかみが祀られるのだという。この、なにやら訳のわからない、怪しげな祭祀の新設は、三輪氏にとつて、身を投げ打つても阻止そしせねばならない大問題であった。

だが律令制度を支える祭祀の確立のためには、どうしても行かねばならない。菟野は伊勢行幸を強行し、高市麻呂は職を辞した。古い祭祀に固執した三輪氏に代わって、この新しい祭祀を司つかさどるのは中臣氏である。『天神賀詞』は中臣氏にとつてもまた、都合よく書かれている。